

2025年度 ソニー幼児教育支援プログラム  
「科学する心を育てる」～豊かな感性と創造性の芽生えを育む～

## 自然とのかかわりから育まれる科学の芽 ～地域との絆を大切に～



貝塚市立西幼稚園

# 目次

1. はじめに	1
2. 本園が考える『科学する心を育てる』とは	1
3. 実践事例	2
①カイコと仲良し 《5歳児》	2
【エピソード1（カイコとの出会い）】	2
【エピソード2（カイコの成長の速さに驚き）】	2
【エピソード3（カイコの変化に驚き）】	3
【エピソード4（大切な命と向き合う葛藤）】	4
【エピソード5（初めての糸繰り体験）】	4
【エピソード6（待ちに待ったカイコガとの出会い）】	5
【エピソード7（大好きなカイコのことを誰かに伝えたい）】	6
②田んぼの生き物、こんにちは 《3歳児・4歳児・5歳児》	8
【エピソード8（幼稚園の田んぼに稲を植えよう）】	8
【エピソード9（幼稚園の田んぼに生き物を住ませたい）】	9
【エピソード10（オタマジャクシがカエルになった）】	10
【エピソード11（トンボがいっぱい田んぼに遊びに来たよ）】	11
4. 課題と今後の方向性	12

# 1. はじめに

本園は、地域の方が幼児教育の重要性から、幼稚園設置を強く要望され、昭和49年5月10日設立された地に愛された園である。令和7年度で51年目を迎え、現在は3歳児4名、4歳児10名、5歳児7名、計21名の園児が元気いっぱい過ごしている。51年経った今も、地域の方と園児とのつながりは強く、子どもの「もっと触りたい」「もっと知りたい」という願いにつながるような出会いをたくさん提供して下さっている。日々、地域との絆を大切に、自然を取り入れた豊かな体験を通して子どもの学びを深めている西幼稚園である。

## 2. 本園が考える『科学する心を育てる』とは

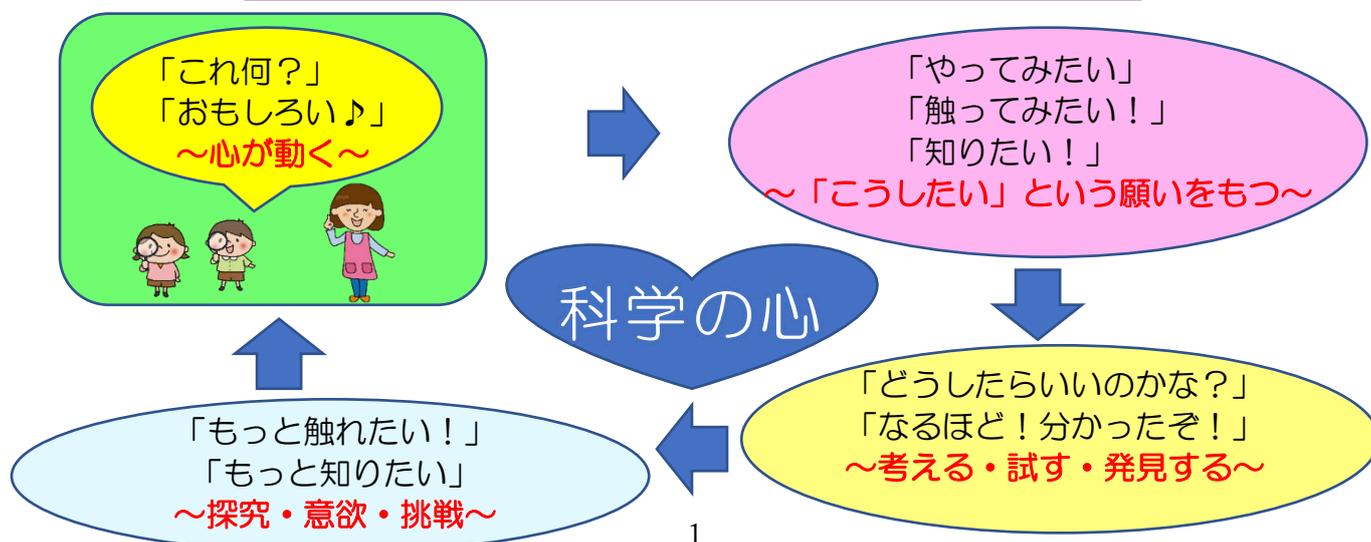
子どもたちは興味のあること、もの、ひとに出会った時、目がキラキラと輝き、ワクワクと心を動かしている。その心もちに寄り添い、教師も一緒にワクワクする中で、子どもの思いがより鮮明に見えてくる。

本園が考える『科学する心を育てる』とは、子ども一人一人の「これ何?」「おもしろい」などの小さな心の揺れ動きを教師が読み取ることからスタートしている。子どもと教師が共主体となり、「触れてみたい」「どうなっているのか知りたい」と感じる対象に、とことん向き合い、考えたり、悩んだり、試したり、発見したり、納得したり、満足したりなどの思いを共有している。その中で子どもたちは教師には考えつかないようなアイデアや意見を出したり、「もっと触りたい」「もっと知りたい」「もっとやりたい」と意欲的に行動したりする姿が見られ、日々子どもたちがもつ力やパワーに驚かされている。

また、子どもの心が揺さぶられる体験は園内だけではなく、地域の方々や自然とのつながりの中で生まれることも多い。今年度は地域とのつながりから育まれる科学の芽について、エピソード記録をとりながら研究を進めているところである。

幼児期に感じたこと、学んだこと、体験したからこそ見えた風景は、子どもたちの心の中に残り続け、それらが土台となり、将来に渡って、健康な心と体、豊かな感性や表現、言葉、人とかかわる力、自然を大切に作る心など、様々な力へとつながり、限りなく伸びていくと信じている。

《本園が考える『科学する心を育てる』のサイクル》



### 3. 実践事例

#### ①カイコと仲良し 《5歳児》

『地域の方からおもいがけないプレゼント』

令和4年度、生き物への興味が強い幼稚園の子どもたちの日々の姿を地域の方に伝えていたところ、家でカイコを卵から毎年育てておられる地域の方が、「幼稚園の子どもたちも育ててみる？」とその年の5月に小さなカイコを持ってきてくださった。喜んで分けていただいたが、カイコの飼育は当時勤務していた教師全員が経験しておらず、地域の方に教わったり、インターネットでカイコの情報を集めたりしながら「ちゃんと育つか？」と、子どもたちとともにドキドキワクワクしながら成長ぶりを見守ってきた。カイコとの触れ合いを通して育つもの大きさに気付いた教師は、その後も毎年地域の方をお願いして、カイコと5歳児の子どもたちが会い、触れ合う機会をつくっている。カイコとともに生活する中で、子どもたちは心が揺さぶられるような様々な体験をし、毎年多くの学びを得ている。

【エピソード1（カイコとの出会い）】 令和7年5月12日

偶然、ヤモリを園庭で見つけた子どもたちは「さくらちゃん」と名付けて大切に育てていた。さくらちゃんが生きるために、何が必要かクラスのみんなで調べた子どもたちは、生きている小さな生き物が必要だと知り、クモを毎日探しては食べさせる日々が続いていた。

そんな時、地域でカイコを育てている方が、「今年もカイコを持ってきたよ」と10頭の生まれたての小さなカイコの幼虫を持ってきてくださった。生き物に愛着をもち始めていた子どもたちが新たな生き物と出会い、生態に興味をもったり、命を大切に感じたりする体験になればと願い、喜んで分けていただいた。

ウニョウニョと動きながら桑の葉を食べている幼虫の様子をじっくりと観察したり、「わぁ、やわらかい」と優しく触れたりなど、興味をもって見ていた子どもたちであった。



「大好きなさくらちゃん」



「カイコ10頭もらったよ！」



「カイコってかわいいな♪」

《考察》

初めは生き物にあまり興味がなかった子どもたちが、ヤモリに親しみをもち、愛情深く育てていた時期だったので、初めて見るカイコにもすぐに興味をもち、「小さいな」「かわいいな」などの言葉がたくさん出ていた。ヤモリと子どもたちの共同生活は、他の生き物に対しても愛情をもつ姿や、自ら世話をしたいという意欲などにもつながっていた。

【エピソード2（カイコの成長の速さに驚き）】 令和7年5月13日～6月上旬

カイコを分けてくださった地域の方は、幼稚園が土曜日と日曜日は休みということで、金曜

日に引き取りに来られ、その間、カイコの成長具合を見たり、桑の葉を与えて世話をしたりし、また月曜日に持ってきてくださるという生活のサイクルが始まった。毎週月曜日、カイコに会うたびに「わぁ！また大きくなっている！」と、成長の速さに驚いていた子どもたちであった。

「カイコが大きくなってきたから、そろそろ一頭ずつ入れるお家を用意してあげてね」と地域の方に教わると、早速、クラスでカイコの家作りが始まった。段ボールの箱の中を10個の部屋に仕切り、各部屋にカイコを一頭ずつ入れていく子どもたち。「この子はリボンちゃんっていう名前にしよう」「この子は、ふわふわちゃんがいいな」とそれぞれ名前を付けていた。



「お家ができだよ〜♪」 「この子の名前はふわふわちゃん」 「自分の部屋ができうれしいな」  
《考察》

子どもたちは、カイコの大きさが短期間でどんどん変化していくことに興味、関心をもっていた。月曜日、カイコに会えることを楽しみにしている子どもたちの姿から、カイコはやもりとともに、自分たちの生活には欠かせない大切な仲間になっている様子がうかがえた。一人ずつカイコに名前をつけたことにより、自分のカイコという意識が強くなり、より親しみの気持ちをもつことができていた。

### 【エピソード3（カイコの変化に驚き）】令和7年6月上旬

カイコが糸を出したり、繭を作ったりする生き物だということは図鑑を見て知っていた子どもたちだが、どこから糸を出すのかは知らずにいた。「糸って口から出すのかな？」「ぼくは、お尻から出すと思う」など子どもたちが疑問に思っていたが、本物を見て知ってもらいたいという思いから教師はあえて何も言わずにカイコが糸を吐き出す日を待っていた。いよいよカイコが口から糸を出し始めた様子を見て「わぁ！口から糸を出すんや」と子どもたちから歓声が上がった。「カイコが出す糸の長さは1500mあるらしいよ。幼稚園からAさんの家よりも長いんだって」と教師が子どもたちに伝えると「この小さな体のどこにそんなにいっぱい糸が入っているの？」と、さらに驚いていた。

その後もカイコが糸まみれになってどんどん姿が見えなくなっていく様子や繭が出来上がっていく様子を興味津々で見つめていた子どもたちであった。出来上がった繭を見て「丸い形にするのすごいね」「なんで繭はみんな同じ形になるんやろ？」「カイコは中で何しているのかな？」など、自分が不思議に思ったことや感じたことを言葉にしている子どもたちであった。



「わっ！口から糸を吐くんや」 「カイコが見えなくなってきた」 「ほんまに繭になるんやな」

## 《考察》

子どもたちは初めて見る光景に驚いたり、知りたかった事実を知ることができたりして、心から感動していた。カイコの不思議さ、カイコのもつ力の素晴らしさなど、これまでの「かわいい」という感情とはまた少し違う気持ちを抱きながら見ている子どもたちであった。

### 【エピソード4（大切な命と向き合う葛藤）】令和7年6月上旬

飼育していたカイコ10頭が全て繭になったので、その後、この繭をどうしたいか教師が子どもたちに聞いてみた。「糸を採るためには熱湯に繭を入れ、そこから糸をほぐす」という方法を聞いたり、「繭のまま置いておいたら蛾になって出てくる。その蛾は空を飛べないし、ご飯も食べられないので、長くは生きることができない。でもタマゴを産める」という情報を得たり、「昔からカイコは人間が糸をつくるために育てられてきた大切な生き物である」という歴史を知ったりした子どもたちは、真剣な表情で繭と向き合っていた。そこから子ども同士で話し合いが始まった。

「糸を作りたい」「でも、死んでしまうやん」「じゃあ、一つだけ」

「でも、一つでも死んでしまうやん」

「蛾になっても飛ばれへんし、ご飯も食べられへんし」

「でもタマゴ産めるやん。そうしたらまたカイコになれるんやで」「…」

一日では答えが出ず、数日かけて話し合いが行われた。子どもたちは悩んだ末、カイコは“糸をつくるために生まれてきてくれた生き物”であることに感謝をして一人一つずつ繭から糸を紡ぐ体験をすることに決めた。残りの3つの繭は「どんな蛾が生まれてくるのか見てみたい」という子どもたちの希望で、繭のまま置いておくことにした。



## 《考察》

子どもたちはこれまで大切に育ててきたカイコへの愛情から心を決めきれずにいる様子が見られた。友達の意見に耳を傾けたり、自分の素直な思いを伝えたりする中で、互いの心の中にある感情がよく分かり、同感する思いや曲げたくない意志など、様々な気持ちに触れることが出来た。教師は子どもが全員同じ思いにならなくてもよいと考えていたが、最終誰かの意思に流されるのではなく、子どもたちは自分で考え抜いて決めることができていた。

### 【エピソード5（初めての糸繰り体験）】令和7年6月11日

糸から繭を採る日、神妙な表情で優しく繭を熱湯に入れる子どもたち。糸の先を見つけると、わくわくしながらクルクルと糸を巻き取り始めた。「どこまでも続いている」「Aちゃんの家より遠いぐらい糸あるってこと?」「すごいな」「長いな～」「きれい」「サラサラ」「ツルツル」「髪の毛みたい」など、子どもたちからいろいろなつぶやきが出ている。とても時間はかかったが、誰一人として「しんどい」「疲れた」などの言葉が出なかった。糸を巻き終えた後、「ありがとう」とカイコに向かって語りかける子どもたちもいた。



「長い～♪」



「ツルツルの糸や」



「頑張って全部巻いたよ」

糸を全部巻き終えた後、繭の中のカイコがどうなっているのか気になった子どもたちは繭を切り開き、開けてみることにした。茶色のサナギが全く動かない様子から、カイコの死を受け止め、「お墓を作ってあげたい」という言葉が子どもたちから出た。園庭の隅に穴を掘り、「ありがとう」「天国で幸せに過ごせますように」とみんなで願いながら、茶色のサナギを埋めていた。



## 《考察》

糸の手触りに感動したり、長さに驚いたりするだけではなく、たくさんの話し合いを通し、カイコの命と引き換えにいただく絹糸の重みを感じていた子どもたちだったからこそ、「ありがとう」の気持ちを感じながら糸を繰っていた。全部巻き終わるまで1時間以上かかったが「疲れた」「しんどい」などマイナスの言葉が一切出なかったことから感謝の気持ちが大きかったように感じる。自分たちのために命をかけて糸を作ってくれたカイコが、天国で幸せになれるよう願いながらお墓を作る子どもたちの姿から、生き物の命を慈しむ気持ちもしっかりと感じていた様子がうかがえる。

愛情をもって世話をしてきたカイコの命、死と向き合わせることに對し、教師は「糸繰りの体験は子どもたちにとって、ショックが大きすぎるのではないか」と悩んだが、子どもたちは死と向き合うことで、命の大切さ、尊さに心から気付いたり、様々な生き物の命をいただいていることへの感謝の気持ちにつながったりすると考え、子どもに糸繰りについても知らせた。

時間をかけて本気でカイコの命について友達と語り合った子どもたちは、互いの価値観に触れ、「死」と「生」について自分なりに考え、心を大きく揺さぶられる体験となった。

## 【エピソード6（待ちに待ったカイコガとの出会い）】令和7年6月下旬

登園してきた子どもたちが「どうなっているかな？」と何気なく段ボールの中を覗くと真っ白いカイコガが生まれていた。カイコガを初めて見る子どもたちは、喜びよりも「これがカイコの蛾？」と半信半疑のような様子であった。繭をよく見ると穴が開いていることに気づき、「ここから出てきたんや」「やっぱりカイコの蛾や」と大喜びした。7人クラスのため、10頭のうちの7つは糸を採るために命をいただいたので、残りの3つから生まれてきた蛾を子どもたちはより大切に思い、「かわいい」と言いながら毎日手に乗せて可愛がる様子が見られた。

また、子どもたちが降園した後に、カイコガが卵を産む瞬間を教師が動画に収めることができたので、それを大型テレビに映して見せると「こんなにいっぱい卵を産むの？」と驚いていた子どもたちであった。初めは白い色をした卵だったのが、時間をおくと茶色に変化し、数日後、カイコガが動かなくなって死んでいる様子も見届けた。「かわいそう」「卵を産んでくれてありがとう」という言葉が子どもたちから出ていた。



「カイコガが産まれた♪」「繭に穴が開いているぞ！」



「かわいいな♪」



「卵の色が変わってる」

## 《考察》

初めは見たことのない真っ白な色をした虫を見て不思議そうにしていたが、繭に穴が開いていたことを確認し、そこから出てきたことを確信した子どもたちはカイコガの誕生を心から喜んだ。7名のクラス、一人一つずつ繭から糸繰りをするので7つのカイコの命をいただいた体験から、無事に生まれてきた3頭を見て心から喜び、大切に触れ合う子どもたちの姿が見られた。また、カイコガがたくさん卵を産む様子を見て、驚きとともに、新しい命と出会えたことをとても喜んでいて、カイコガの死とも向き合い、「タマゴを産んでくれてありがとう」という言葉から生命のつながりも感じるようになっていた。

### 【エピソード7（大好きなカイコのことを誰かに伝えたい）】令和7年7月上旬

生まれたてのカイコを大切に育ててきたこと、カイコが糸を吐いて繭作りをしたこと、繭から糸を繰ったこと、カイコガに出会えたことなど、様々なことを知ったり、体験したりしてきた子どもたちに、教師が「カイコのことをみんなに教えてあげるのはどう？」と投げかけてみた。

進級当初は、人前で話をするをあまり好まなかった子どもたちであったが、「カイコのことを伝えたい」と前向きな気持ちになっていた。カイコと出会い、一緒に過ごしてきた日々を教師がカメラで撮影していたので、写真を現像して子どもたちに見せると「初めはこの写真」「次はこれやな」とカイコの大きさを見比べたり、カイコが変化していく様子を思い出しながら「この次はこれ」と順を追ったりして、写真を並べ始めた。

その時々感じていた子どもの思いも言葉にして写真に添え、カイコの一生を記録した大きなポスターが出来上がった。

まずは保護者の方に見てもらおうことにした。どの場面を誰が説明するか話し合っただけ、保護者の前に立った子どもたち。少し緊張しながらも自分の言葉で説明しようとする姿が見られた。保護者の方からは「たくさん人の前で説明している姿を見て、とても成長を感じました」という感想を聞かせていただいた。

さらに近隣の小学校3年生の前でも話をさせていただく機会を作ることができた。近隣の小学校とは、つながりが深く、互いの子どもの育ちのために教師間でねらいやめあてを明確にし、交流する機会が多い。今回は『5歳児クラスの子どもたちが、自分の体験したことを人前で伝えたいという意欲をもち、聞いてもらえたことで自信をつける』というねらいを小学校の教師に伝えたところ快諾してくださり、3年生の子どもたちの前で発表できることになった。3年生はちょうど生き物の学習をしていること、また3年生も地域の方にカイコを分けていただき、繭まで育てた体験をしていることから、繭になったその後に興味をもっているのではないかと予想し、3年生を対象に発表させていただくことにした。

当日、3年生の教室に入ると少し緊張していた子どもたちであったが、保護者の前で話をした体験が自信となり、普段より大きな声で説明しようとする姿が見られた。

3年生は興味をもって話を聞き、「えっ？繭から糸をとれるの？」「糸に触ってみたい」「蛾のオスって卵を産むの？」「大きな声で言ってくれたから、話がよく分かったよ」など、子どもたちに積極的に質問したり、認め言葉をかけてくれたりした。質問一つ一つに対し、自分たちが

体験して知り得た知識を自信に満ちた表情で答えようとする子どもたちの姿が見られた。



「この写真の次はこれやな」



「段々と大きくなっていったね」



「カイコのお話を始めます」



「3年生の教室でもお話しするよ」



「へ～。こうやって糸をとるの？」



「先生も糸を触っていい？」

### 《考察》

カイコと初めて出会い、愛情をもって世話をしてきた体験、糸を繰るための方法、その時の気持ち、カイコガからタマゴが産まれた時の様子など、子どもたちは緊張しながらも、たくさんの方の前で伝えようとしていた。5歳児クラスに進級した当初は、自分の思いを言葉にして伝えるのが恥ずかしくて、できるだけ言葉ではなく、態度で示そうとしていた子どもたちが、カイコに対する思いはとても強かったため、「誰かに話したい」「伝えたい」という気持ちが芽生えていた。その思いが芽生えたタイミングを大切にしたいと思い、聞いてもらえるよう保護者と近隣の小学校の3年生に協力を依頼し、場をすぐに設定したところ、子どもたちの言葉を真剣に聞きながら受け止めてくれた。

カイコについて、自分たちが経験してきたことや感じた思いを話す体験は子どもたちの大きな自信となったようで、他の様々な場面でも積極的に発言しようとする姿が増えてきた。

ワクワクするような感動体験は、子どもたちの「話したい」「伝えたい」という思いや言葉が自然と溢れてくることを改めて実感することができた。

### 《カイコを通じた活動について 総合考察》

地域の方に分けていただいた貴重なカイコとの出会いを通して、子どもたちは生態や特徴を知るだけでなく、愛情をもって世話をしようとする気持ちを持ち、命の尊さにも気付くことができた。今年度5歳児クラスを担当する教師はカイコの飼育をする体験が初めてで、子どもたちと同じ目線でカイコの成長をともに喜んだり、真剣に命と向き合っている子どもの姿を見て心を大きく揺さぶられたりしながら日々過ごしてきた。教師の心が動いているかないか、子どもたちは敏感に感じ取っている。子どもと教師の信頼関係もぐんと深まると同時に、本気で子どもも教師もカイコと向き合ったからこそ、たくさんの体験の中で深い学びを得ることができた。

また、カイコの命をいただく体験を通して、給食で食べている鶏や豚、牛などにも思いがつながり「ありがとう」と感謝の気持ちをもちながら食べようとする姿にもつながった。

## ②田んぼの生き物、こんにちは 《3歳児・4歳児・5歳児》

### 『地域の方から頂いたもち米の苗』

地域の農家の方から、もち米の苗をお裾分けしていただいた。令和4年度にも、地域の方からももち米の苗を分けていただいたことがあり、その時は2ℓのペットボトルを横にして植木鉢のようにし、田んぼの土を入れて、苗を植えた。子どもたち一人一人、毎日自分のペットボトルに水やりをし、大切に苗を育てたところ、稲は太く大きく育ち、穂も出来た。お米の重みで穂が垂れ下がり始めたところで、子どもたちが稲刈りをして収穫をした。その後、保護者の方と一緒に牛乳パックを活用し、工夫しながら脱穀したり、すり鉢に米を入れて野球のボールでかき回しながら粃摺りをしたりする体験も行った。米は各家庭に持ち帰り、家族で分け合って食べることにした。残った稲を使って、正月前に保護者の方としめ縄作りにも挑戦した。



「よし！稲刈り終了」



「粃摺りもできた」



「素敵なしめ縄もできたよ」

### 【エピソード8（幼稚園の田んぼに稲を植えよう）】令和7年6月中旬

米作りを通した学びの深さを知っている教師は、今年度、生き物に興味をもつ子どもが多く、興味がない子どもにも関心をもてるよう、園内に大きな田んぼを作って、稲を育てながら、生き物も育てる作戦に出ることにした。

教師が園庭を掘ろうとするが、田んぼの土ではないため硬くて掘ることが困難であった。そこに地域の方が「本当に幼稚園の中に田んぼを作るの？」と驚きながらも、耕運機を使って田んぼ作りを快く手伝ってくださった。大きな穴を掘ったところにブルーシートを敷き、その上に土と水を入れ、幼稚園の田んぼが完成した。



「耕運機で土をフカフカにしよう」



「幼稚園に田んぼを作りたい！」

田んぼは金曜日の夕方から夜にかけて作ったため、子どもたちは次の月曜日に登園して初めて田んぼに気付く。朝から「何これ？」「プール？」と興味をもって田んぼの周りに集まる子どもたちであった。

「中に入っても大丈夫よ」という教師の言葉に、迷わず田んぼの中へ入る4歳児、5歳児や、汚れることに躊躇している3歳児など様々な姿が見られた。泥んこになりながら「ニュルニュルしてる」「気持ちいい～」など、生き生きとした笑顔で言葉を発している4歳児、5歳児、教師の様子を見て、初めは躊躇していた3歳児も「ちょっとやってみようかな」と感じたのか、自ら土の中に入り、足の裏から感じる何とも言えないニュルニュルした感触をおもいきり楽しんでいた。

そしていよいよ田植えを行うことになり、地域の方から苗の持ち方、植え方を教わった後、子どもたちは田んぼに小さな稲をたくさん植えた。「水に浮いてこないようにしっかりと土の中に挿してね」「そう、上手!」と地域の方が優しく丁寧に教えてくださるので、子どもたちは進んで何本も苗を植え、「自分でできた」と喜んでいた。



「ニュルニュル気持ちいい～」



「汚れても平気だよ♪」



「稲の苗植え、自分でできた♪」

## 《考察》

突然園庭に現れた幼稚園の田んぼに興味をもった子どもたちであった。初めは教師主導で始まった田んぼ作りであったが、自分たちの田んぼという思いをもってもらいたいという願いから泥の中に入って土を柔らかくする大切さを知らせたり、自分の手で苗を植えたりする体験ができるようにした。泥の中は砂と水だけで危険なものはないため、おもいきり泥遊びを楽しめる環境であるという安心感が教師の中にあり、子どもたちが満足いくまで遊び込めるようにすることができた。

泥の感触を足の裏から感じ、「ニュルニュルする」「気持ちいい～」などの言葉が思わず出たり、汚れることへの抵抗があった3歳児が4歳児と5歳児から刺激を受けて自ら中に入ろうとしたり、田植えという体験に初挑戦し、自分の力でできることに喜びを感じたりなど、子どもたちの様々な学びにつながっていた。

## 【エピソード9（幼稚園の田んぼに生き物を住ませたい）】令和7年6月後半

田んぼといえば「オタマジャクシがいる」と知っている生き物に興味のある子どもたちは、「幼稚園の田んぼにもオタマジャクシを入れたい」という思いが芽生えた。そこで地域の方に「オタマジャクシが欲しいのですが、捕らせていただいてもよいですか?」と尋ねたところ、「いいですよ。こういう体験は子どもたちにとって大切やからどんどんやらせてあげて」という言葉をいただいた。

子どもたちと教師は、バケツと網をもって早速地域の田んぼに出かけたところ、オタマジャクシは全く見つからなかった。代わりに見たことのない不思議な生き物を数匹捕まえることができた。ワクワクしながらインターネットで調べてみたところ、それは「ホウネンエビ」

と「カイエビ」であった。『ホウネンエビがたくさん発生する年は豊作になると言われている』ということが書かれてあり、子どもたちと教師が喜んだ。田んぼにとってよい生き物であることが分かった子どもたちは、田んぼをスイスイ泳ぐホウネンエビを毎日うれしそうに眺めていた。

しかし、オタマジャクシがほしいという思いはまだ叶えられておらず、「オタマジャクシはどこにいるのかな」と探す日々が続いた。もち米の苗を分けてくれた地域の方にもオタマジャクシがどこにもいないという話をしていたところ、「今日はオタマジャクシがいっぱいいるからおいで」と子どもたちを誘いに来てくれた。

子どもたちはワクワクしながらバケツと網をもち、地域の方について歩いた。田んぼに到着すると、田んぼの中に無数の小さなオタマジャクシが泳いでいた。子どもたちは歓声をあげ「オタマジャクシがいっぱい」と目をキラキラ輝かせながら捕り始めた。オタマジャクシの動きが思った以上に素早く子どもたちは苦戦していたが、あきらめずに捕ろうとしていた。一時間ほど捕って満足した子どもたちは、オタマジャクシを大事に幼稚園に持ち帰り、念願であった幼稚園の田んぼにオタマジャクシを放流することができた。



「オタマジャクシを捕りにおいで」「わあ！オタマジャクシがいっぱい」 「ヤッター！幼稚園の田んぼにオタマジャクシを入れたぞ」

### 《考察》

田んぼにオタマジャクシは必ず泳いでいるものと考えていた子どもと教師は、なかなか見つからない状況に戸惑ったが、地域の方からの情報でようやくオタマジャクシと巡り合うことができた。しかし、なかなか見つけれない体験の中でカイエビやホウネンエビとの出会いがあったり、よりオタマジャクシを見つけたいという思いが強まったりとプラスになる面もあった。

オタマジャクシを自分たちの田んぼに入れたいという目標を達成するために、素早い動きのオタマジャクシを一生懸命目で追い、網ですくおうとしていたが、なかなか思うようにはいかなかった。時間がかかっても自分の力で捕ろうとする姿から、あきらめない心の育ちも感じることができた。幼稚園の田んぼに捕まえてきたオタマジャクシを放流することで、達成感や満足感を幼稚園のみんなでも共有することもできた。

### 【エピソード10（オタマジャクシがカエルになった）】令和7年7月中旬

毎日、田んぼのオタマジャクシが泳いでいる様子を見たり、すくって遊んだりしていた子どもたちが、数日後「オタマジャクシに足がある！」と気付いた。よく見ると他にも足が生えているオタマジャクシがたくさんいることに驚き、興味津々で子どもたちはその姿を見つ

めていた。さらに数日すると手も生え、しっぽがなくなっていく過程も観察し、自分が見つけた変化をうれしそうに教師や友達に伝える子どもたちの様子が見られた。カエルが田んぼで泳いでいるところを発見した子どもは、「カエルや～」と興奮して友達や教師に伝えていた。さらに数日経つと田んぼの周りをカエルがたくさん跳び回っていた。カエルを手に乗せてじっくりと観察したり、つかまえては田んぼに入れることを楽しんだりしている子どもたちの様子が見られた。また、表現活動としてオタマジャクシの絵を描いた4歳児の子どもたちは、ただ描くという姿ではなく、オタマジャクシー匹一匹に心を込めて描き、今にも動き出しそうな絵になっていた。



《考察》

「オタマジャクシ速い！難しいな」 「オタマジャクシの絵を描いたよ」

オタマジャクシが身近にいる環境になったので、いつでも観察したり、オタマジャクシすくいをしたりできることを子どもたちは喜んでいました。子どもだけではなく、教師も毎日田んぼの生き物を見ることが楽しくなり、教師間でも田んぼにまつわる話が増え、そこから次は子どもたちにどのような力を育むことができるのか、みんなで考える時間が楽しくなった。また、保護者も子どもの送迎時に田んぼを覗き、「オタマジャクシ、大きくなってきたね」と保護者間で話をしたり、月一回行われる未就園児の園庭開放でも小さい子どもが興味をもって田んぼの生き物を見たりする姿が見られた。

目につきやすい環境だったからこそ、生き物の小さな変化にも気付きやすく、園児や教師だけの感動体験ではなく、保護者や地域の方も心を動かすことができている。

毎年、子どもたちがカエルを見つけたくてもなかなか見つからなかった園庭に、今年は無数のカエルが跳びまわっていて、生き物が大好きな子どもたちにとってパラダイスのような空間となった。

【エピソード11（トンボがいっぱい田んぼに遊びに来たよ）】令和7年中旬～8月下旬

7月中旬、夏休み前になるとトンボが田んぼの上をたくさん飛び始めた。夏休み中の預かり保育で登園している子どもたちは8月中旬、見たことのない生き物を見出し喜んでいました。それはトンボの赤ちゃんであるヤゴであることを知り、興味をもって見ていた。また、大きくなってきた稲を見て、「このお米、どこまで大きくなるのかな？」「宇宙までいくんじゃない？」など、楽しそうに想像しながら話す子どもたちの姿も見られた。



「これ何？見たことないものがある」「これがトンボの赤ちゃん？」 「お米どこまで大きくなるのかな？」

《考察》 教師の願いとして、稲を育てながらオタマジャクシも育て、子どもたちの田んぼに住む生き物に対する興味や関心を深めていきたいという思いがあったが、トンボまで田んぼに来てくれることは想像していなかった。二匹で連なって田んぼの水にチョンと入ったり、ヤゴが田んぼの中で歩いたりしている様子を見て喜んでいる子どもたちの姿に、自然を呼び込む環境作りの大切さを実感した。

#### 《田んぼを通した活動について 総合考察》

田んぼ作りがもたらしたものは、子どもたちの生き物や稲に関する興味関心の深まり、自分たちの願いを叶えてくれる地域の方へ感謝の気持ちをもつこと、どうしてもオタマジャクシを捕りたいという目標達成に向けた粘り強さ、田んぼを通して人がつながり合うなど、教師が予想していたものよりもはるかに超える学びやよさがあった。

自然との触れ合いは自分の思うようにいかないことが多く、その都度子どもたちはどうしたらよいのか考えたり、工夫したりする機会にもつながった。

今後も稲の生長を子どもと一緒に見守りながら、いろいろな生き物との出会いを大切にすること、そして収穫後、子どもたちがやりたいと願っているもちつきを目標にしながら稲の栽培活動を続けていきたい。

## 4. 課題と今後の方向性

カイコ、田んぼの事例両方とも、地域の方の子どもに対するおもいやりの気持ちからスタートしたものであった。教師が願っている『子どもに育みたい力』についての話を聞き、快く協力してくださる地域の方々にはいつも感謝の気持ちでいっぱいである。まさに子どもは家庭と幼稚園だけではなく、地域全体が育ちの場となっている。今後も引き続き、地域の方々、そして豊かな自然の力をお借りしながら、子どもの「おもしろそう」「やってみたい」「どうしたらいいのかな」「分かった」「できた」「もっと知りたい」など、科学の芽となる思いを大切にしていきたい。

そして何より、まず、子どもの心の揺れを感じたり、気付いたりし、その思いを大切にできる教師の温かい心がなければ、子どもに豊かな感性や創造性の芽生えなどは育めないと感じている。子どもがありのままの思いを素直に表現し、受け止めようとする教師の存在。決して子どもの成長や学びを急がせたり、教師の考えた内容を子どもがそつなくこなすことをよしとしたりする保育であってはならないと考えている。教師として当然のことであるが、常に自分の保育を振り返り「あの時、子どもの気持ちに気付いていたのか」「さらに子どもたちの学びにつなげるためには、どのような環境がよいか」と本気で考えられる教師集団でありたい。ある保護者の方が「この幼稚園は大人のためにあるのではなく、本当に子どものためにある幼稚園ですね」と言ってくれた。その言葉が物語るように「子どものための幼稚園」だからこそ科学の芽は育まれると感じている。今回、論文を作成するにあたり、幼児教育の本質を改めて考える機会となったことを大変うれしく思う。今後も目の前にいる子どもとともに「おもしろそう」「とにかくやってみよう」とワクワクしながら保育を行っていきたい。

【執筆者】小豆澤 さおり 【研究代表者】渡部 妙子・多田 利恵・松本 彩佳

【研究同人】山中 瑞穂・細川 美佳・岸 幸実・永田 美邦